

おもてなしの国、日本

南 鉉城 (ナム ヒョンスン)

毎年年末に日本ではその年に最も流行した流行語が発表される。昨年の流行語は「ワイルドだろお」で東日本大震災があった 2011 年は「なでしこジャパン」であった。今年の流行語は何だろうか？おそらく「おもてなし」ではないかと思う。これは 2020 年のオリンピック招致のために元女性アナウンサーが最後のプレゼンテーションで使用した言葉だ。彼女がプレゼンテーションの最後に伝えた「おもてなし」という言葉は非常に短かったが、日本の文化や日本人の心を象徴するのに最も相応しい言葉だったのではないだろうか。もちろん、彼女のプレゼンテーションのおかげだけで 2020 年の東京オリンピックが決まったとは言えないが、このことが世界にインパクトを与えたのは間違いないと思う。東京に投票した多くの IOC 委員たちは東京の治安、交通、施設などを高く評価しただろうが何よりも日本国民のゲストを温かく迎える心、つまり「おもてなし」が最も高く評価されたと思われる。

ここでは私が体験した日本のおもてなしについて三つのエピソードを紹介したいと思う。

2005 年私は初めて日本を訪問した。千葉大学大学院で 2 年間留学することになった。初めて訪問する日本だったので期待半分不安半分だった。成田空港に到着すると、千葉大学の留学生担当者が迎えに来ていた。私の名前が書かれた紙を見つけてとても嬉しかった。日曜日だったので、大学から私を迎えに来てくれるとは思わなかったのだ。その方は親切に私を留学生寮まで案内してくれた。そして寮に到着すると、千葉大学の日本人学生が私を迎えてくれた。オフィスは、私だけではなく多くの留学生と千葉大生で混雑していたが、すぐに何人かの学生が私の荷物を持ち寮の部屋まで案内してくれた。彼らは留学生を支援するために自発的に来てくれたそうだ。休日の遅い時間に、外国からのゲストを迎えてくれる彼らに本当に感動した。次の日から始まった留学生オリエンテーションで私は再び感動を受けた。親切な説明も良かったが、千葉大学生が一人一人留学生の隣に座って丁寧に説明してくれた。つまり一対一で支援を受けたのだ。私はすごく大事にされているという感じがした。オリエンテーションが終わってから区役所に行って外国人登録を終え銀行に行って口座を開き携帯電話も契約した。このすべてのことに日本人の大学生が同行してくれたのだ。彼らのおかげで楽に留学生活を始めることができて嬉しかった。

留学した 2 年間、日本人のおもてなしは続いた。定期的に地域住民が留学生のために歓迎会、バザー、食事会、送別会を開いてくれたし、月に一回日本文化講座を設けてくれた。私もそれらに参加して茶道、書道、かるた、相撲、剣道、柔道、弓道などが学ぶことができた。日本のおもてなしは、私が日本に着いてから日本を発つまで継続されたことになった。日本人だれでもこのようなおもてなしは当然なことだと考えているかもしれないが、米国、イラン、ニュージーランド、フランス、イギリス、トルコで観光ではなく留学や仕事のために住んでいた私は日本人のおもてなしは特別だということがよく分かっている。

日本人のこのおもてなしの精神のおかげで、イランで危機の時に助かった経験もある。1999 年から 3 年間、私はテヘラン韓国人学校の教諭として働いていた。夏休みを利用して家族と一緒に多くの遺跡が残っているイスファハンとシラーズに車で旅行に行った。時間を節約するためにサービスエリアで休まずに私は妻と交代に運転しながら異国の道路を走って行った。後部座席には、2 歳の息子が寝ていた。イランの高速道路は案内標識が少なくして少し不安だったが砂漠の道を走る気分は最高だった。近くに都市がなくて通る車もほとんどなかった。暗くなるのにガソリンがほとんどなくて不安になってきた。もう少し行くとガソリンスタンドがあるだろうという希望は闇の中でますます不安に変わって行った。周辺は暗くて光もなかった。すると車のエンジンが突然止まった。携帯電話もなかった時代だから、助けを求める方法もなかった。通る車に助けを求めようと待ったが通る車はなかった。2、3 時間待っても車は見えなかった。寒さと空腹に子供は泣き出した。その時、遠くから車のライトが見えた。その車は私の車の前で停まった。そこからイラン人が降りてきた。私もイランに来て間もなかったのでペルシア語ができなかったし、イランでは教育を受けた一部の人々を除いては、ほとんどの人が英語ができなくて、この状況をどのように説明すればいいか心配していた。すると、そのイランの人が「日本人ですか？」と日本語で話しかけてきた。私は日本人ではないが日本語ができて良かったと思いながら事情を説明した。すると、彼は彼の車のトランクからホースとオイル缶を出して車のオイルタンクのバルブを開け、口でガソリンを吸ってオイル缶に入れ始めた。そして、溜めたガソリンを私の車のオイルタンクに入れた。そして 30 分ばかり行ったところにガソリンスタンドがあるので、「心配しないでください」と言った。全然知らない外国人のために自分の口の中にガソリンを吸うなんてと、私はとても感動してお金で感謝の気持ちを伝えようとした。しかし、彼は断りながらこう言った。「日本の京都で 3 年間仕事をしたが、その時、日本人のおもてなしに感動して、自分もいつかは他人に助けを与える人になりたいと思った。」あの時、彼の助けがなかったら、そして私が日本語ができなかったらと考えただけでもぞつとした。私は彼の連絡先をもらいテヘランに戻ったあと家に招待し、感謝の気持ちを伝え

た。彼は後でテヘラン日本人学校の先生を紹介してくれた。これをきっかけにして紹介してもらった日本人学校の先生と友達になり学校間の多様な交流を行った。その中で韓国人学校の生徒と教師が日本人学校を訪問したことは一生忘れられない。日本人学校に入ると「韓国人学校の皆さん、日本人学校の訪問を心から歓迎いたします。」とハングルで大きく書かれていたのが見えた。そして、靴箱には、私たちの名前がハングルで書かれていた。学校案内は韓国人学生一人に日本人学生一人一対一で行われた。お互いの言葉はよく通じなかったが、日本人のゲストを迎えるおもてなしを感じることができた。日本人学校訪問を終えた後、韓国人学校の生徒たちの日本に対する考えに変化が生じた。訪問前に、歴史問題などで日本を嫌っている子供たちが多かったが、日本人学校の訪問後、日本の子どもたちと友達になりたいという子供が増えた。日本人のおもてなしのおかげで新しい関係が作られたのだ。

先週テレビで新幹線特集放送を見た。九州新幹線ではお客さんから要望を受け、夢を実現させてくれるイベントを定期的にやるそうだ。今回は退職した中学校時代の先生のための特別なおもてなしが主な内容だった。先生の教え子達と彼らの家族約 200 人が新幹線に乗った。絵や写真が飾られていた壁には、中学校の校章が飾られていた。新幹線が動くと全車両に校歌が流れてきてみんな一緒に歌った。ランチには学校で食べたパン、牛乳などが出てきた。しばらくして車掌服を着た先生が登場してみんなと一人一人挨拶を交わした。通常は、このような場を設けてくれ本当にありがとうと形式的な挨拶なのに、感動感動の連続だった。しかも、この感動はここで終わらなかった。ある駅で一時停車をするとサブライズで先生が青春時代に好きだった歌手が乗り込んできて驚きのコンサートが始まった。この歌手とおなじ舞台上で歌うことが先生の長い間の夢だったのだ。コンサートは各車両に設置されていた大きなモニターで生中継されていた。映画ではなくコンサートのために設置されていたのだ。こんな素敵なおもてなしがあるだろうか？感動した先生が泣いている姿をモニターで見ていた教え子達は泣き始めた。テレビを見ていた私も泣いた。このように日本人のおもてなし精神を説明するエピソードはたくさんある。

私の好きな日本語は絆だ。そうだ。おもてなしは絆を作るのだ。千葉大学で留学がうまくできるように手伝ってくれた学生たち、命を救ってくれたイラン人、テヘラン日本人学校の先生たちとの絆は今も続いている。私は相手が本当に必要なものが何なのか探りながら相手の立場で考える時、本当に感動を与えることができるということを学んだ。そして、日本の学生が留学生と兄弟姉妹のように一対一で関係を結んで助けを与えたこと、日本人学校の生徒が一人一人の学校案内をしてくれたことのように、おもてなしは一人一人相手を大事にすることなのだ。単純に韓国から来た外国人ではなくナムヒョンスンという個人

として大事にしてもらうからこそ感動されるのだ。2020年東京オリンピックの時、多くの外国人が日本に来る。彼らが望むのは、単に便利な交通、素晴らしい競技場、宿泊施設、おいしい食べ物などではない。一人一人のゲストとして待遇を受けたいということなのだ。日本人のおもてなしがあるかぎり東京オリンピックは成功するだろう。このおもてなしで世界の人々との新たな絆ができるのだ。この絆で日本と世界がより良い関係になってほしいと思う。「おもてなしで作られた絆」、あまりにも素敵な言葉だ。